

現代詩



# 水槽のような街

大平雅芳

おぐりあつこ

## 靴底の光くつそこ ひかり

市民病院からの帰り道  
駅まで辿る朝と同じ道

歩道のうえで揺れる 虫食いの葉っぱ  
穴のあいた場所が多いけれど 光は  
そこを選んでとおりぬけてゆく

朝方の雨のしづくも

とおりぬけながら 光を  
うみおとし ふるわせている

ずっと とどまることのない 光を  
みんな さがしているけれど

靴底の光を 落ち葉が奏でる  
僕らは知らずに  
足音を鳴らす

僕は霧の中を魚のように泳いだ  
水槽のようなこの街を  
銀行の角を曲がり未完のビルの下を泳ぐ  
よくみると僕の廻りにも無言で  
夢遊病者のように大勢の人が泳いでいた  
深い霧  
水槽の出口はどこにあるのか  
僕たちはタールと防臭剤の烈しい匂いの  
橋をわたりさらに泳いだ  
スカイツリーの半分が亡靈のように  
屹立している  
水槽の出口はどこにあるのか  
十一月のやるせない  
霧の街の奇形なビル  
この街の曇天の  
灰色の風に逆らうのでもなく  
僕たちは出口のない水槽の中で  
ただ魚のように泳ぐだけだ

# コーヒー

坂倉玲子

佐藤裕一

疲れた時  
コーヒーを飲むと  
元気になれる気がする  
心が落ちついて  
ほんわかしてくる

舌に広げて 味わうと  
喉から鼻に香りが通る  
リラックスして ゆっくり飲む  
そうすると たしかに今  
元気が沸いてきた  
よかつた ありがとう  
わたし につこりする

熱烈なサユリストだつた僕が  
タヅエストに「転向」して三十二年  
今の日本に まだ  
サユリストは 何万人もいるのだろうが  
タヅエストを自称しているのは  
きつと 僕一人だ

買い物に出かけようとして 振り向きざま  
「あつ  
大切なことを一つ言うのを忘れていた  
私 貴方のこと 大好きです」  
などと言つて  
ケラケラと笑う君  
大空に向けて 僕は  
タヅエストの旗を  
高く 高く 高く 掲げよう

## 少年セーラスマン

山野 浩一

## 鎌倉にて

山田 にしこ

少年と呼ばれた日々の  
記憶は流れ星のように過ぎ

今はただ日の暮れが待ち遠しく  
空を見上げる

いつもの焼き鳥屋で一杯  
ガンバリマス だなんて

高度成長期のような資本の意地張つて  
今宵もまた細胞を裏切つて  
いる

泣きながら眠り  
毎朝後悔している  
酩酊の炎天下を走つて  
嘔吐をこらえる

いつものおでん屋で一杯  
立派なセールスマンになつたね  
なんて

お願いだから言わないのでおいて  
星のような悲しみを  
知らないでいたいから

放された  
花鳥風月が  
生気を取り戻す瞬間は  
いにしえの世を詠み解くようだ

八幡様の境内は幻想世界を具現化する  
魅力で満ちている

花は花梅

八重の花弁が  
凜として

濃い紅を鮮やかに見せる  
鳥は黒鳥

お堀の水面をつつく姿は  
濁んだ水面とは対照的に光り輝き

風は北北東  
月は雲の裏側で見え隠れする

